



2005年日・EU市民交流年

フレンドシップウィーク参加企画



福澤諭吉と  
文久使節団が訪れた欧州



期間：5月9日(月)～23日(月)

慶應義塾大学  
三田メディアセンター  
展示委員会  
第221回展示



## < 福澤諭吉と文久使節団が訪れた欧州 >



### 展示にあたって



#### 「日・EUフレンドシップウィーク」って何？

日本とEUは国際政治経済の舞台において、共に大きな影響力を持ち、両者の間では、国家首脳レベルの外交や経済界の交流などが盛んに取り交わされています。但し通常の単一国家とは異なり、EUは複数の加盟国を股にかけた、鎧のように堅固で複雑な組織の上に成り立っています。さらには輪番制で議長国を受け持つ制度や、多岐にわたる条約や法律の数々、また各加盟国の立場や地域委員会の存在など、EU以外の国にとってはイメージを描きづらい事も少なくはないでしょう。

駐日欧州委員会代表部（在東京）はそんな我々とEUとの橋渡しを目指し「日・EUフレンドシップウィーク」という企画を2001年から開催しています。期間中に全国の様々な機関で開催されるイベントは、親しみやすい気楽なものが中心とされ、EUや欧州に対して新しい側面を発見する事ができるかもしれません。

今回、慶應義塾大学が企画するのは「福澤諭吉と文久使節団が訪れた欧州」展です。義塾の創設者である福澤先生が幕末に通詞（通訳）として参加された文久遣欧使節団の目に映ったヨーロッパとは？そして現地の人々は初めて見るサムライをどう感じたのでしょうか？EUには新しいイメージが強いですが、日・EU市民交流年にあたる今年には、開国前夜の日本と欧州の人々が興味津々にお互いを窺う様子をご紹介します。



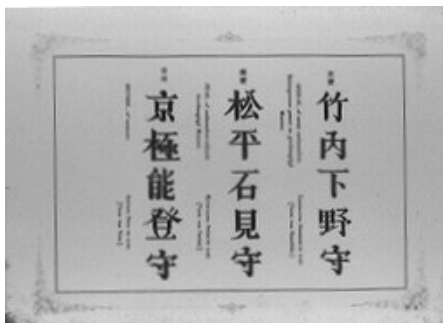
#### EU資料センター（EDC）

慶應義塾大学三田メディアセンターは、欧州委員会が指定するEU資料センター（European Documentation Centre = EDC）の一つとして、1982年からEU公式資料や各政策分野に関する広報資料を収集しています。EUについて調べているなど、これらの資料をご覧になりたい方は図書館4階にお越しください。

## 《文久使節団》

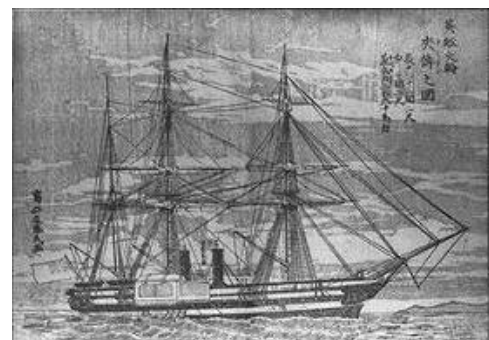
文久使節団とは 1862 年（文久 2 年）、オランダ、イギリス、フランスとの修好通商条約(1858 年)で交わされた両港（兵庫、新潟）両都（江戸、大坂）の開港開市期日の延期交渉とロシアとの樺太国境画定交渉を目的として、ヨーロッパに派遣された使節団の通称である。メンバーは正史に外国奉行兼勘定奉行の竹内下野守保徳（1897～？）、副使は外国奉行兼神奈川奉行の松平石見守康直、監察使に京極能登守高朗らと福地源一郎、立広作、寺島宗則など総勢 38 名。福沢諭吉は当時 27 歳で備通詞（＝通訳）として随行していた。1862 年 1 月にイギリス軍艦オーディン号で品川を出港、4 月にパリに入った。5 月にイギリスで両港、両都の開港開市を 5 年間延長するといったロンドン覚書を締結した後、オランダ、ドイツ、ロシア、ポルトガルを訪問し開港開市問題の無かったドイツ以外の各国と交渉をまとめて 1863 年 1 月帰国した。（HK）

写真右)  
「ヨーロッパ派遣の幕府使節一行」1862 年  
撮影地 オランダ



写真左)  
「オランダ政府印刷日本使節名簿」1862 年  
幕府使節一行にオランダ政府から贈られたもの。

図版右)  
「オーディン号の図」  
幕府使節一行の乗艦、イギリス軍艦オーディン号



## 《フランスにおける福澤諭吉》

1862（文久2）年、福澤諭吉は「文久遣欧使節団」の通訳として、ヨーロッパ6カ国を半年かけて巡った。ヨーロッパ滞在の第一歩は、フランスからであった。



『西航手帳』福澤諭吉[著] 1冊；17×8cm(手稿の複製) [1BA@34]

「文久遣欧使節団」でパリに滞在中に手帳を購入し、ヨーロッパ滞在時に各国の文化や技術、制度、風景等、様々な見聞を詳細に書き留めた。記された内容は、当時の外交の様子や、幕末明治期の日本における西洋文化の影響について知る上で重要な資料となり、後に出版された『西洋事情』の柱ともなっている。今回展示する『西航手帳』は、1984年に福澤諭吉生誕150周年を記念して(社)福澤諭吉協会から出版された復刻版である。 (AY)

写真右2枚とも  
「福澤諭吉肖像」 1862年  
撮影地：フランス



< 参考展示 >

**Paris and environs with routes from London to Paris : handbook for travellers /**

Karl Baedeker; 18th rev. ed. , 1913

当時のパリの地図。ナポレオン3世による大規模な都市整備が行われた直後で、福澤諭吉らが訪れた場所の多くは現在でも建物がそのまま残されている。



## 《イギリス訪問》

『西洋事情』 福澤諭吉著 初版 慶應2(1866)年 [126@29@10]



本書は初編と二編から成る福澤諭吉の代表的な著作である。『西洋事情』では福澤諭吉が3回渡航して得た外国での見聞が記されているほか、アメリカ、イギリス、ロシア、フランス、オランダなど西洋文明国の歴史や経済社会、政治制度についても紹介されている。

福澤諭吉は幕府の訪欧使節団の一員として、1862年5月1日に開催された第2回のロンドン国際博の開会式に参列している。初編には博覧会の項目があり、この中で「千八百六十二年、竜動(ロンドン)に博覧場を設け、毎日場に入るもの四、五万人に下らず。来卯年は仏蘭西の巴里斯(パリ)に之を設くと云う」と記述している。蒸気機関車や蒸気船、伝信機、瓦斯灯などの技術革新についても触れ、19世紀後半のめざましい産業革命の進展の成果を紹介している。当時、日本人は西洋について断片的な情報しか得ることができず、また得る手段も持っていなかった。福澤諭吉は洋書から得た知識をわかりやすい言葉で訳し、本書で体系的に紹介している。このため『西洋事情』は多くの人に受け入れられた。一説によれば初編は15~20万部が売れ、関西では海賊版も出たと言われている。『西洋事情』は、単に西洋の紹介本にとどまらず、今までの日本になかった社会経済や政治の基本原則を記すことによって、日本の古い社会構造や体質、政府を批判し、近代化への道筋をつけるという大きな役割を果たした。(TI)

図版右)  
イギリスの新聞 Illustrated London News に掲載された  
「国際博覧会場の日本使節の図」1862年

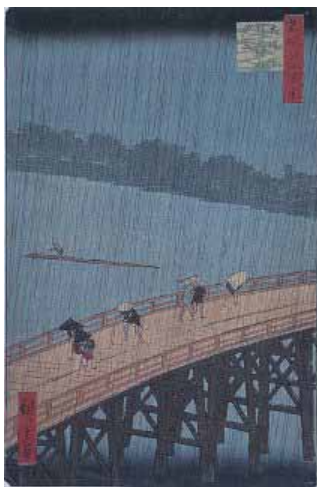


写真左)  
「福澤諭吉肖像」 1862年  
撮影地 イギリスまたはオランダ

## 《日本ブームの到来》

1862年当時の欧州の人々にとっては、東洋といえば中国が多少なりともなじみのある国であった。だが、天正・慶長使節団以来、実に約250年ぶりに現れた日本からの使者は、それをはるかに上回るエキゾチックな存在として迎えられた。

中でも鎖国時代から貿易相手として接点のあったオランダでは、他の欧州諸国に比べ日本輸入の品々 (Japannerie) が入手しやすかったこともあり、1832年にシーボルトが『北斎漫画』を紹介したのを契機にフランスやイギリスにさきがけていわゆるジャポニズム (日本趣味) が既に萌芽の兆しをみせていた。そして、福澤諭吉も足を運んだ1862年のロンドン万国博の日本館、さらに1867年のパリ万国博に出展された様々な美術品が欧州全体のジャポニズムを高揚させ、印象派美術の革新運動に大きく貢献したといわれる。



図版左)

「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」

大判錦絵 歌川広重筆 1857年

図版右)

ジャポネズリ  
「日本趣味：雨中の橋（広重を模して）」

油彩 V. Gogh 1887年



(出典：上記2点とも「ゴッホと日本展 / 京都国立近代美術館、世田谷美術館編」AE@12A@1992@33)

## 《欧州文化の日本への啓蒙》

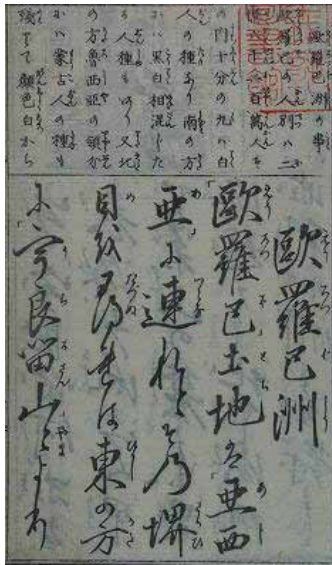
『西洋衣食住』 片山淳之助 慶應3(1867)年 [121@303@1]

福澤諭吉は江戸末期に三度も外遊する機会を得た。旅で身に付けた最先端の知識と経験を生かした著作が『西洋旅案内』『西洋衣食住』である。これらは海外旅行者向けに書かれた手引書であるが、船賃や保険の話題にまで及ぶ『西洋旅案内』とは対照的に、今回展示する『西洋衣食住』(片山淳之助の名で執筆)は初めての一人旅でもまごつかないよう、西洋生活の基礎(衣食住)について、多数のイラストを添えて分かりやすく説明している。「シヨルツ(シャツ)」や「子ッキタイ(初タイ)」などの衣服の種類や着方、「庖丁(ナイフ)」と肉刺(フォーク)での食事のマナーなどなど、当時の日本人達が西洋の不思議な道具や生活習慣を興味しんしんに眺める様子が、楽しく目に浮かぶのではないだろうか。(MT)



『世界国盡』 福澤諭吉訳 明治 2(1869)年 6冊 [123@3@3]

明治政府は文明開化の号令のもと、諸外国との本格的な外交を再開した。だがその一方で、



国民たちは 220 年以上の長きにわたる鎖国の結果、外国に対する知識を著しく欠いていたため、

西洋と肩を並べる文化国家を目指すには広い教育政策が必要と判断された。福澤諭吉はそんな折、児童・婦女子の啓蒙を目的として様々な外国の教科書を吟味し、『世界国盡』6巻にまとめた。この本は漢字に全て振り仮名をふり、七五調の語呂がよい文体を導入するなど、世界地理や歴史について子供でも楽しく学べるように工夫されている。このような親しみやすさに満ちた『世界国盡』は当時絶大な支持を誇り、10人に1人が読む程のベストセラーになったという。(MT)

- 1巻：アジア 2巻：アフリカ 3巻：ヨーロッパ 4巻：北米  
5巻：南米・オセアニア 6巻：付録

『増訂華英通語』 万延元(1860)年 [110X@351@2]

横浜訪問を機に、国際的言語としての英語の必要性を痛感した福澤諭吉は簡略な辞書も手がけている。欧州歴訪(1862年)に先駆け、万延元年(1860年)に咸臨丸で渡米した際、英語・中国語の対訳単文集『華英通語』を入手。これに独自にカタカナで和訳と英語の発音を加えて作った新たな辞書が、今回展示する福澤諭吉の初めての著作『増訂華英通語』である。

11-X Niece. 姪時	姪 女	11-X Male. 咩悅	男
11-X Grandchild. 明孫	孫	11-X Female. 咩悅悅	女
11-X Husband. 婿時悦	丈夫	11-X Son. 新	子
11-X My. 威父	妻	11-X Daughter. 那打	女

『増訂華英通語』は開化前夜の辞書にふさわしく、数々の新しい言葉や表現を日本にもたらした。例えば「V」の発音を表現する文字として現代日本でも一般的に使われている「ヴ」は、本書『増訂華英通語』が起源である。また「炮製類」の項に入っている「コルリ」は「Curry」、つまり「カレー」という言葉を日本に初めて紹介した例と言われる。(MT)

また「炮製類」の項に入っている「コルリ」は「Curry」、つまり「カレー」という言葉を日本に初めて紹介した例と言われる。(MT)

